

として敏腕を振るっていただいております。

(愛媛県 山本 繁夫)

コムソモリスクの酷寒で夜間作業

愛媛県 山本 繁夫

八月十七日に武装解除を済ませてソ連軍の軍門にくだった。雑囊に新しい軍足(靴下)に白米を詰め込んだのを二本と乾パン二袋を入れ、徒歩で図們の満鉄男子宿舎に入り一週間ばかり過ごした。この間は隣接の陸軍病院へ使役に出て、ソ連軍の血だらけの包帯を敷地内の小川で洗濯をしたくらいは軽作業であった。宿舎の塀に沿って二メートル以上の背丈のひまわりが、直径三十センチくらい大きな花を太陽に向かって雄々しく力強く咲かせているのを見て、何と男らしい元気な花だと、敗戦によって消沈していた私の心を鞭打ってくれた。

翌日やはり塀に沿って何気なく散歩していると、八

センチと十一センチの大きさで五ミリくらいの厚さの『日露会話帖』が、置いてあるのか、わざと落としてあるのか、目についたので思わず手に取って見ると、ダブルウートロム、ダブルベーチェレムとか、日本語のカナ文字と漢字で、お早うございます、今晚は、とか書いてあるではないか。これは便利な品が手に入ったと内心喜んだ。

私は終戦を知った瞬間、これからソ連領内に連れて行かれ、ソ満国境の要塞地帯の再建設に従事させられると思った。また、平岡正夫中佐が部隊長として最後の訓示を全員にされた際にハッキリと、「これから恐らくソ連国で色々な作業をさせられ皆を真綿で首を締めるように労働で苦しめるけれど、それに負けぬよう、協力して皆無事に日本へ帰ってくれ」と、懇々と話してくれたので、当時十九歳の私はまともに受け、信じていた。

図們的宿舎から延吉の飛行場へ移り十日ばかり過ごしている間に、一生懸命にロシア語の会話を覚えたのである。延吉から百キロ行軍とか二百キロ行軍とか言

われて、毎日三十キロくらい一週間ほど歩いて琿春コシユンを通じて国境を通過したのである。原隊に入隊のため朝鮮から満領に入ったときは夜間列車の中で寝ていたので、いつ鮮満国境を通過したのか覚えてはいないが、今回は昼間、砂漠の中を歩くように、広々とした曠野の中の広い道幅の未舗装の道路を、二十分も三十分も前からあそこの丘が国境だと教えられ遠望しながら、列車の踏切の遮断機のようなものをくぐってソ連領に入った。

三十分か一時間歩いて初めてクラスキノという美しい村、そして海が見える丘にて大休止となった。赤や緑に塗ったお伽話に出てくる、オランダかスイスか知らぬが内地では見られぬ玩具のような小さな建物の部落を通り抜けたのである。この時、壁や門に見慣れぬ文字が書いてある。もちろん横文字であるが、学生時代に習った英語と少し異なる。英語と同じ字もあるが、英語と字画の反対のものもある。発音も違っていたが、この時初めて、中等教育ではあったが両親から教育をさせていただいた恩をしみじみとありがたく思ったので

ある。クラスキノでは、米や乾パンに代わって九月中旬に初めて黒パンが配給された。大きな一本のパンを七人くらいで分けて食べたことを思い出す、酸っぱい味がキツと印象的であったが、二日目から空腹のせいか、とても美味に感じた。

美しい丘、クラスキノの村で十日間くらい野営した。やがて貨物列車に乗り込んだ。日本のより大きなガツシリとした貨車で、中に四十人くらい詰め込まれたので窮屈な思い出がある。

九月下旬になると涼しくなり、淋しくなってきた。手持ちの財産も少なくなり、心細くはなったが、まだ体力はあった。戦友で下痢したりして弱っている者もいたが、終戦後四十日、風呂も散髪もないが、まだ軽作業くらいで重労働というほどのものはなかった。

私の所属した作業隊の名前は今でもハッキリと覚えている。間島（延吉）編成の第七大隊である。大隊長は大島中尉（よその部隊の人で、岐阜県の人らしい）で、私たちの四中隊長は三宅正教さんという新任少尉であった。当時、私はこの方の部下で、一緒にコムソ

モリスクへ到着してからも作業に出て、能率の上がない穴掘りの土工作業で、ノルマが上がりぬと怒るロシアの監督さんと私たちの板挟みになって苦勞されていたお顔が忘れられない。

当時、私はちょうど満二十歳になったばかりだった。三宅少尉殿も恐らく幹候上がりで私より二、三歳年長だと思ったが、実際は五歳年長だった。コムソモリスクの収容所はハバロフスクから二五〇キロ北で、北緯五十二度でアムール河の流域にある工業都市であった。造船所、飛行機工場、レンガ工場、魚缶詰工場、製材工場があり、建設途上の将来性のある町に思えた。当時人口は十万人くらいだった。日本人の収容所も第一から四までと、郊外に五、六、七、九収容所と第十一の九分所と中央病院があり、一万人から一万二千人収容され、前記の工場と伐採作業とバム鉄道建設、レンガ四階建てのアパート建築に従事した。

私は、入ソ前の原隊は重砲第三連隊一大隊本部だったが、八月十七日朝、飯上げに八人で出かけ暮舎に帰った午前六時半ごろ、他の古兵たちは白頭山を目指して

逃亡したのだった。仕方なく私は一中隊の蒲敏勝准尉（愛知県出身）のもとに出頭して「山本候補生以下六人を面倒見て下さい」とお願いしたところ、気持ち良く「今日からワシの中隊へ入れ」と了解していただき、在ソ三年の間ずっとお世話になった。

この重砲兵三連隊の一中隊は本当に関東軍の精銳の猛者ばかりで、中には相撲とりも二、三人おり、甲種合格のバリバリで身長も五尺四寸から五尺六寸と高く、体重十六貫、十七貫はザラで、中には二十貫という、ガッチリとした方ばかりだった。私たち大隊本部は初年兵の現役兵三人と在満の召集兵（昭和十九年十月）の三人で、いずれも熊本県出身者だったが、残念なことに、私以外の五人はコムソモリスクの土となった。同年兵の幹候生中平純郎伍長（高知県）、下士候志願の越智清一等兵はついに倒れられ、召集の吉田さん、吉弘さんらの優しい方も、二十年の暮れから二十一年の二月にかけて眠るがごとく他界され、私は残念で残念でたまらなかった。一大隊本部の下士官、川島美夫軍曹や兜森伍長、大岩班長、渡辺甚之助兵長（岩手県

胆沢郡)が一緒にソ連でいてくれたら、あるいは中平君、越智君は他界していなかったと思う。

一大隊本部から一中隊の砲手の多い頑健な体躯の作業班に入って、昼間の労働、初年兵として当然の朝夕の飯上げ、食器の片づけ、掃除。私は当時、伍長の階級章と座金を襟につけてはいたが、候補生でも後に初年兵もいなかったので万年初年兵だった。昼間の重労働に疲れ果てて、夜九時過ぎ床についてまどうとうとした九時半から十時ごろに「夜間作業呼集」「各小隊より十人ずつ」とかの声に起こされ、「山本よ、行ってこい」と誰からとなく名指しされて、服装を整え、忘れもしない、昭和二十年十一月上旬から年末まで、昼間の重労働に加え夜間作業、石炭降ろしとレンガ建て四階アパート建設に、明け方四時か五時、もちろん周囲真っ暗、帰営して一時間か二時間の仮眠だった。零下二十度、三十度の屋外で、十分な食事もなく、不完全な服装で馴れない土方作業、本当にブツ倒れそうな環境の中でスコップを振りかざし、ドスカー(板材)の上をターチカ(一輪車)を押してフラフラと重いレ

ングを二十枚か三十枚ずつヨチヨチと運んだあの夜、何日続いたのか。今考えてみるとウソのようである。

お粥のような食事にマッチ箱大くらいの小さな黒パンで、一日何カロリーあったのか。仮に一八〇〇カロリー摂っていたとしても二〇〇〇カロリーの仕事(労働)を毎日していれば、一日当たりマイナス二〇〇カロリーの消耗である。一カ月にすれば八〇〇〇カロリーの赤字。人ソ当時五十五キロの体が四十キロの体重になるのは当然であった。ヒザと骨盤だけで、手足は折れそうなくらい、骨と皮であった。身体検査で美しい女軍医に尻の皮をつねられ、級の判定を何度か受けた。一級から二級へ、二級から三級へ、そして三級から〇・K(オー・カー)になって初めて営内作業の軽労働に二カ月くらい従事して、体力が回復したのは、昭和二十一年の三月から五月初めの、アムールの結氷が「ガバツ、ガバツ」と割れる音が聞こえるころであった。先ほども書いたが、そのころ、気がついた時には中平君、越智君、吉田さん、吉弘さんらが亡くなられていたのだ。悔しくて悔しくて、あんな立派な同年兵を

亡くして、一緒に内地へ帰る約束をしていたのに……。

平成二年七月、(財)全抑協の第一回墓参に参加させていただき、ハバロフスク、ザビタヤ、ピロビジャン、ホールなどの墓地や土饅頭の墓地を岐阜の鈴木善三様らと五十人で墓参に訪問した際、未だに凍土に戦友が「鬼哭啾々」そのままの状態で眠っていた。あのコムソモリスクの夜間作業を思い出し、墓参のときの土饅頭を思うと、私どもはこのままでは死んでいけないと思うが、当時の食糧、給与のもとで酷寒零下三十度の屋外での作業は、シベリア抑留体験者でなければわかってもらえないと思う。

因みに、私のいたコムソモリスク五分所は、木造二階建て四棟に、当初昭和二十年十月上旬、ちょうど千五百人の日本人がいたのだが、昭和二十一年二月には生存者は千人になったと覚えている。つまり死亡率三三％だった。転入転出もあったが、昭和二十三年五月に閉鎖するときは七百五十人、二年半で生存者は半分になった。死亡率五〇％と私はハッキリ記憶している。

シベリア抑留の各資料によると、コムソモリスク地区は当初一人から一万二千人いて、二〇％から二五％の死亡率となっているが、私たちの五分所は五〇％の死亡率であった。この事実あればこそ、戦争はしてはならない、こんな経験は自分の孫や子に体験させたくないと思うのである。

昭和二十年十一月だったか、今もコムソモリスクの中央にある四階建てのアパートは、私たち抑留者が六カ月から一年かけて、四棟か五棟建設したもので、今でも記念するかの如くそのままに立派に残っているが、この陰には、沢山の同胞が祖国を見ずに望郷の念にかけられながらたおれていったのである。このような悲惨な思い出は自分たちだけで十分である。

いつまでもいつまでも戦争のない平和な世界であるように、ただただ祈るばかりである。

合 掌

生年月日 大正十四年九月二十四日

出生地 愛媛県松山市千舟町三丁目一番地

学歴 愛媛県松山商業学校卒

職業（入隊前） 日本電気株式会社総務部

〃（復員後） 東急百貨店 紳士服売場

入隊部隊 重砲兵第三連隊 第一二二五部隊

終戦地 東滿、問島省 凶們街西方高地

戦友会 満州第一二二五部隊（重砲兵第三連隊）

四国戦友会（昭五四結成）

平成二年七月 （財）全抑協主催第一回墓参に参加

（ハバロフスク州）

（財）全抑協入会（個人にて）

平成八年二月 「愛媛シベリアを語る会」結成

平成九年三月 （財）全国強制抑留者協会愛媛県支部

設立

四月 愛媛県慰霊祭

愛媛県シベリア抑留慰霊碑建立委員会

設立

十二月中旬 シベリア抑留慰霊碑（愛媛県松山市）

完工

【執筆者の紹介】

山本会長さんとの出会いは、勇崎作衛氏の「シベリア抑留絵画・慰霊墓参写真展」が最初の出会いです。物腰の柔らかな誠実なお方との印象を受けました。愛媛シベリアを語る会（仮称）があることを聞きし、山本会長さんのお人柄に魅かれて入会させていただいた次第です。

本年四月には慰霊祭に参列、シベリアを語る会の設立総会に出席し、会長さんをはじめ諸先輩のお話をお聞きし、酷寒のシベリアで帰国の夢叶わず散った同胞のことを思い起こさせていただき、感謝と申し訳ないという気持ちでいっぱいです。

山本さんのリーダーとしての積極的な取り組みと寝食を忘れての行動力には敬服いたしております。

私も微力ですが、少しでもお役に立ちたいと思っております。

（愛媛県 高岡 功武）